

ワンポイント・ブックレビュー

デイビット・ザルツブルグ著、竹内恵行・熊谷悦生訳

『統計学を拓いた異才たち～経験則から科学へ進展した一世紀～』日本経済新聞社、2006年

政府、労働組合などが政策的な取り組みをしていくに当たっては、必ずその根拠が求められる。そして、その根拠を得るために重要となるのが調査といえよう。ただし、その調査が導き出すものがはたして本当に正しいといえるかどうか、この点を明確にするのが統計学である。

本著は、カール・ピアソン、R・A・フィッシャーに始まる現代統計学の進展・確立の過程を描いた統計学史である。大雑把にその内容をいえば、統計におけるデータの収集や分析、適合性などにおけるさまざまな手法がいかんして生まれたのか、そして、それが実生活においてどのような貢献を果たしたのかといった統計学の基礎の誕生物語とでもなるうか。

本著の特徴の一つとして、統計学といういわば数学関連の書籍でありながら、数式がまったく出てこないことがある。つまり、数学（統計学）にそれほど詳しくなくても読むことができるわけである。しかしながら、数式を使わないがゆえに言い回しが複雑になってしまい、より難しくなってしまった部分があることも否めない。

ただ、それでも実生活における統計の適用例などがあげられている部分などは非常に興味深く読むことができる。例えば、本著の一番初めに出てくる話は、「婦人は紅茶の違いを言い当てられるか」というおよそ難解な統計を使う必要性を感じない、日常のなかでの出来事を研究者たちが検定してみようというものである。結局、この問題に対する答えはでていないものの、このような、他愛のない普通のことに対する興味から統計が発展していく様子が描かれている点は、興味深い。また、先に進むと、ニューディール政策時のワシントンDCにおいて、大きな母集団からいかんして標本をとるかという、現在でも使われているサンプリングのあり方への検討など、統計的な考え方が非常に重要な役割を果たすことも紹介されている。

このような事例が多く取り上げられていることによって、こんなところに統計学が役立っているのかという発見も多いが、一方で、それぞれの事例の紹介に不足感があり、中途半端に終わってしまっていることは残念である。それでも、統計の利用方法を知ることによって調査活動やさまざまな数字の読み方を知るための一助になると思われる。

私見だが、統計学というと、みたこともないような難しい数式が羅列される難解な学問というイメージが付きまとっているように思える。しかし、本著はそのようなイメージとはかけ離れたところにあり、単純に読み物としても楽しめるものとなっている。統計学への興味がある人ならもちろん、そうでない人も手にとってみてはいかがだろうか。(T.K.)